

むらで暮らすことを  
芸能の軸に

「志多ら」は、愛知県小牧市で1990年にプロの和太鼓集団として結成されました。同年3月には、中央小学校（現在・東栄小）の和太鼓クラブを指導した縁で、廃校になった直後の東蘭目集落（ひがしらのめ）の小学校に住むことになりました。

当時の東蘭目集落は35軒ほど。閉校直前の児童数は4名ほどでした。むらの皆さんのなかには、「志多ら」がどんなグループなのか、「よそも」が集団で住みついて何をするのか、など複雑な思いがあったと思いますが、ひとまず受け入れてくれました。

ところが、東蘭目に拠点を移してまもなく、静岡県熱海市でのホテルの営業公演のため、志多らは1年近く東蘭目を留守にしました。そのとき、「移り住みながらほとんどむらで暮らしていない。そんなことでよいのか」という疑問がメンバーのなかに湧き出てきて、「芸能集団だからこそ、地域に根ざすことを活動の軸にしよう」という考えが、次第に志多らの本格的な想いとなっていきました。当時学生で、太鼓に関わっていた私

# 「よそも」が、むらで祭りを担わせても、らうまで

「愛知県北設楽郡東栄町」

文・写真提供：大脇聡（南志多ら総合統括プロデューサー）



東栄町から望む奥三河の山並み

22年前、よそから入ってきた和太鼓集団が、むらの誇りの伝統芸能「花祭り」を担い、次世代へつなごうとしている。

## 花祭りとは

冬至の前後に、太陽の力の復活を願って行なわれる「霜月神楽」の一種。鎌倉～室町時代に熊野の修験者が、東栄町をはじめ北設楽郡一帯に伝えた。

祭りでは、「生まれ清まり」「擬死再生」という思想の中で、一昼夜を通して休みなく様々な神事や舞が行なわれる。

内容の順番は地区によって若干異なるが、基本的には、神を迎える神事後、「稚児の舞」「青年の舞」「鬼の舞」、湯で清める「湯ばやし」など40以上の舞を、「てーほへ、てほへ」と歌い踊って願いを奉じ、神を天空へ返す神事で終わる。

東栄町では国の重要無形文化財に指定されており、毎年11～3月にかけて11の集落で行なわれ、全国から熱心な観衆や研究者が訪れる。

も賛同し、以来、東蘭目に暮らしています。

「花祭りを手伝ってくれ」と声をかけていただいて

むらの方々との交流は、朝のラニンング中、畑仕事をするおじいさん、おばあさんとの「おはようございます」の挨拶にはじまり、稽古場前のグラウンドでゲートボールをしている皆さんとの会話など。ごく普通の生活の中で少しずつ、むらの方々は、私たちに関心を持ってくれました。

愛知県内でも東栄町は過疎地域であり、70〜80代のお年寄りが多くを占め、その子どもは都市で暮らしていることがほとんどです。ですから10〜20代の私たちがなおさら新鮮に映っていたのかもしれませんが、ちゃんと食べているかを心配して、演奏から戻ると玄関先に野菜が山盛りおいてあるということもしばしばありました。私たちにとってこれらの贈り物がどんなにうれしかったことか。本当にいつも感謝の気持ちでいっぱいでした。

4年後の1994年、地元の皆さんから「せっかくここに暮らしているのなら花祭りを手伝ってく



志多らによる舞。「結界」で守られた神聖な舞庭で、太鼓を鳴らしながら、大地を踏み清め自然に感謝する

れないか」というお話をいただきました。

花祭りは、脈々と受け継がれてきたむらの誇りであり、格式と伝統のある民俗芸能です。そんな祭りに、見物客としてではなく関わられるのは、うれしい反面、本当にいいのか、という気持ちもありました。

しかし、深刻な過疎化で、東栄町の他の集落でも祭りの存続が問題にされ始めていました。せっかくのお話なので私たちもできることからお手伝いさせていただくことになったのです。祭りの準備や片付けはもちろん、笛や舞も少しずつやらせていただき、いまは重要な太鼓も打たせてもらえるまでになりました。

自分たちの芸能活動でも、花祭りをテーマに創作舞をつくることになり、地元の皆さんに花祭りの特徴的な舞を教えるようになりました。完成後は、当時の区長さんより「花まつり志多ら舞」と命名していただき、なんと、これも舞の一つとして、花祭り本番で奉納させていただくことになったのです。

初めて伝統の花祭りの舞の手ほどきを受けたときに、祭りの用語やリズム、仕組みの複雑さに驚き